

ルポ
とかち

ビーコンが示す命

十勝毎日
2015. 2. 22 (日)

新雪を楽しむためにスキー場の管理区域外を滑る「バックカントリー」での雪崩による遭難や死亡事故が後を絶たない。専門的な知識や装備が不十分なスキーヤーやスノーボーダーがバックカントリーで判断を誤ると最悪の事態を招きかねない。冬山を安全に楽しむにはどのような知識や装備が必要なのか。多少のスノーボード経験はあるものの、冬山登山に関しては全くの素人の記者(24)が14、15の両日、芽室町内で開かれた雪崩講習会に参加し、冬山に入る上での心構えを学んだ。

(高津祐也)

ことが必要」と呼び掛けた。

冬山での事故は後を絶たず、今シーズンも全国各地で雪崩による事故が起きている。十勝管内では今月8日、雪崩によるものでは無いが、天候の急変によって帯広市内の女性(53)が芽室岳(1754m)で遭難し3日後に救助された。

ムムロススキー場のコース外で四角柱に切り出した雪を手で数回たたくと崩れ始めた。その強度を評価表で確認すると、「積雪の結合状態があまりよくない」。さらに雪の結晶をルーペで確認すると、雪崩の原因となる「弱層」に分類されるサラメ雪があった。

危険な「霜サラメ雪」

日本山岳会北海道支部がムムロススキー場で行った実地講習には、

雪崩講習会

雪山の熟練者から初心者まで20人が受講した。講師の一人、芳村宗雄さん(80)は「十勝の山は昼夜

の気温差が大きく、雪崩の原因となる「霜サラメ雪」が多い」と指

摘。「入山前に気温や積雪量などのデータなどで複合的に判断する

ない。



冬山登山に欠かせない三種の神器。左からビーコン、プローブ、スコップ

戸惑いながらも、ふと顔を上げた先には雪に埋もれた人の姿が。「半埋没者発見しました。シャベル隊お願いします!」。すぐに指示を送り、次の埋没者の捜索に向かった。

駆け回り埋没者発見

終わってみれば発見から応急手

当てまでの時間は2分50秒。生存

確率が9割以上とされる15分以内

を大幅に切る好タイムだった。だ

が、焦る気持ちからビーコンの画

面に夢中になり、すぐ目の前で顔

が見える状態の埋没者に気付くのが遅れてしまった。

前、日勝峠でバックカントリーを楽しんでいた際、急に発生した霧で視界がなくなり、何とか沢伝いに降りた経験があるという。講習を終え、「冬山装備の大切さを身を持って体験できた。周りの友人たちにも伝えたい」と話した。

同支部の講習会は2008年に札幌と函館が始まり、十勝は今年で5回目になる。きっかけは07年11月23日、上川管内上富良野町にある十勝岳連峰・上ホロカメットク山(1920m)で同支部のメンバー4人が雪崩の犠牲となった痛ましい事故だった。

「冬山のリスクをみんなで共有する場を提供し、情報発信していくことがわれわれの役目」。当時の登山メンバーの一人だった同支部雪崩研修委員長の植田博慈さん(68)は、継続して学ぶ重要性を訴えた。

記者自身、スキー場に行くこと、管理区域外の山林を滑るスノーボーダーをよく目にする。新雪を滑る爽快感には憧れるが、それは単にウインタレジャーの延長ではなく、れっきとした「冬山登山」。悲惨な事故を繰り返さないためには、愛好者自らが知識と徹底した装備を身に付け、「安全第一」という認識を持つことが必要だ。

“三種の神器”でリスク軽減

参加者の一人で、学生時代からスノーボードに親しむ帯広市内の会社員本保貴裕さん(38)は数年

行っ参加者

埋没者の捜索から救助までの訓練を